

琉球大学学術リポジトリ

[書評] 仲程昌徳(NAKAHODO Masanori)著『沖縄文学の諸相：戦後文学・方言詩・戯曲・琉歌・短歌』

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学国際沖縄研究所 公開日: 2016-05-13 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 大野, 隆之, Ono, Takayuki / Ōno, Takayuki メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/33991

[書 評]

仲程 昌徳 (NAKAHODO Masanori) 著

『沖繩文学の諸相——戦後文学・方言詩・戯曲・琉歌・短歌——』

ポーターインク (沖繩) 2010年4月 256頁

大野 隆之 (Ōno Takayuki)

本書のタイトルは『沖繩文学の諸相』という抽象的なものだが、実際一読すれば「諸相」とでも呼ぶほかに無いような、広範な広がりをもっている。さらにいえば本書の広がりには「文学」という語が適切なのかどうかためられるほどであり、仲程昌徳氏にとっての「沖繩文学」とは、言語という形で表現された、近代沖繩の民衆達の生き方の総体というべきものであろう。

近年近代文学研究は、受容者である近代読者や、雑誌の投稿など民衆意識、あるいは大衆文化へと関心を広げるケースもあるが、やはり中心となるのはきわめて個人的な個人であるところの「作家」であり、優れた「作品」である。また「作品」の中でも、「近代小説」が今なお特権的な位置を占めている。例えば漱石や鴎外などについては、現在でも毎年、大量の「研究」が発表されている。これは、それら名作が時代を超えた普遍性を持っていることの証左でもあろうが、一方社会学などの隣接諸科学に対して、文学研究がそのアイデンティティを保持するため、といった側面も否定できない。なんのために「文学」を研究対象とするのか？ 仲程氏の研究業績は、一般的な文学研究者に対して、そのような問いかけを迫ってさえている。

近代文学研究がなぜことに「小説」を主な研究対象としたのか。それは理性的な方法意識で「個人」を対象化して描く、という小説こそ、近代の理性主義、個人主義を代表するジャンルだったからである。そしてこのような特化こそが、大城立裕が芥川賞を受賞するまで沖繩にあった「文学不毛の地」という認識の原因である。いわゆる「標準語」という、広い読者を期待できる言語で、特異な風土、伝統、歴史をもった沖繩という素材を自在に描く事が出来るようになった、というのは、英語でケルト文化を表現しようとしたアングロアイリッシュに相当する快挙であり、現代日本文学の中でも重要な位置を占めている沖繩の小説の意義ははかりしれない。だがその一方で、それ以外は「不毛」だったか、といえ、そうではない。「文学」という概念をより広義にとれば、そもそも沖繩は「文学豊饒の地」だったのであり、一般には意識されない形で、今なお「文学」が広がりを見せている場所である、これが本書の掘り起こした主要なモチーフであらう。

本書は序文をのぞいて四部に構成されている。Ⅰ小説・児童文学、Ⅱ方言詩、Ⅲ戯曲、Ⅳ短歌と琉歌であり、本書の副題にあるとおりだが、それぞれのジャンルを体系的に整理するようなものではない。仮に四人の芥川賞作家を「沖繩文学」の中心であるとするなら、徹底的に周縁に光を当てるものであり、豊かな伝統文化を持ちながらも近代以降強力な政治的圧力や戦争、貧困と直に接しながらも生き抜いた、沖繩の民衆達への視線に貫かれている。以下紙数の限り検討していく。

まず第Ⅰ部「戦後文学の出発」は「戦後沖繩文学の出発」と「揺籃期の児童文学」という二つの論文からなる。「戦後沖繩文学の出発」については仮に「小説」を対象としていると表記したが、

小説そのものの中味以上に、徹底的な破壊を受けた沖繩の戦後状況と、新しい支配者であるアメリカの政策に目が向けられる。また小説の前段階として、「沖繩の伝統的な表現になる歌」を「戦後沖繩文学」の出発点に据える。この点を1953年に城戸裕（大城立裕）、冬山晃がまとめた「戦後の文学」が触れていないことについて、仲程氏は「それは、伝統的な表現の意義を認めなかったということよりも、「戦後文学」という枠にしばられすぎたことであろう」と述べ、自身の「文学」観、「文学史」観を明瞭にしている。すなわち戦後、「文学の不毛の地」沖繩に、唐突に近代的な小説が出現したのではなく、豊かな民衆達の「歌」を背景として「戦後沖繩文学」が成り立った、というとらえ方である。このような文学観から、戦後最初期の小説である太田良博の「黒ダイヤ」および山城正忠の「香扇抄」が論じられていく。「黒ダイヤ」には「革命への「憧憬」」を見、「香扇抄」には「平和への「希望」」を読み取る。いずれも作家個人の個性的な表現というよりも、戦後沖繩が直面した状況への対応という側面に重点が置かれている。

「揺籃期の児童文学」は、まず敗戦直後の児童達の状況から説き起こされる。作品以前に期待される受容者としての児童に焦点を当てることは、仲程氏の方法論をよく示しているといえる。戦後の荒廃は必然的に児童の荒廃を生んだ。その状況に対する『うま新報』『子ども版』や「児童文化協会」の活動が、ここでは中心的なモチーフになっている。従って児童文学史というよりも戦後沖繩の教育史の一面が色濃い。沖繩の児童教育、初等教育の問題は、21世紀に入った現代でも沖繩の重要な課題のひとつであるし、沖繩の文学者の多くは、教師、教育経験者であることから、仲程氏が提示した初期段階における文学と教育との関係性はきわめて重要であるといえよう。ただ一方で疑問点もある。初期児童文学は関係者の高い理想や懸命な努力にもかかわらず、必ずしも大きな成果を上げなかった問題について、仲程氏は『人民文化』誌の発行停止処分などにふれ、「生活の不如意もさることながら出版、表現の自由に対する軍の圧力があつたことも無視できないだろう」と結論づけている。確かにこの問題は無視できない重要な問題である。しかし結論としては若干弱くように思われる。というのは一般的な国語力の向上とはいわゆる標準語の習得にあるのであり、戦後児童文学活動が志した沖繩の伝統文化の尊重という課題との間には、そもそも困難が横たわっていた、と思われるからである。

第Ⅱ部「方言詩の発露・開花」は「琉球方言詩の展開」「方言詩の世界」の二論文からなるが、両者が密接に関連していること、また残念ながら論者たる私がこのモチーフを詳細に検討する能力を欠くため、あわせて概括的に論じていきたい。

まず方言詩というものは、必ずしも沖繩の専売特許ではない。島田洋子『方言詩の世界—ことば遊びを中心に』という書物が一定の注目を受けているし、大阪教育大学をはじめとして、方言詩を用いた国語教育が実験的に行われている。長く続いた中央集権的な政治状況に対して、地方のとらえなおしが進む中、あるいはこの傾向は一定の広がりを見せるのかもしれない。しかし現在のところ、質量、そして何よりも切実さの観点で、圧倒的なのは沖繩であるとみて差し支えあるまい。仲程氏が提示する多様な例は、まさに「圧倒的」というにふさわしいものである。仮に今後日本各地で方言に対する関心が高まるとすれば、既に沖繩で行われている多様な試みは、先駆的な役割を果たすことになるだろう。その一方「方言詩の世界」の末尾にあるように「方言を解する世代が圧倒的に少なくなったことにある」という危機も同時に存在している。既に「琉球語」は今後一世紀以内に消滅する恐れのある消滅危機言語にリストアップされている。これはおそらく全世界的な問題の一つの表れであり、一方で文化の多様性についての関心が高まりつつも、グローバリゼーションに伴うコミュニケーションの均一化、効率化は進行しており、沖繩詩の持つ問題は、実は世界的な文化問題の試金石であるとすらいえる。

第三部「戯曲の革新と展開」は「演劇革新への胎動」「王国の解体」「位牌と遺骨」の3つの論文からなる。

「演劇革新への胎動」は大正期に懸賞脚本として書かれた「時花唄」という作品についての論考である。本書をたどった者には、この「時花唄」という、必ずしもよく知られているとは言い難い作品に、仲程氏がなぜ関心を示したか、容易に理解されるであろう。

まずこの懸賞そのものに仲程氏は関心を示す。これは文学革新運動の一環であると同時に、県民意識の向上、すなわち教育の問題をも含んでいるからである。さらにこの作品はほとんど有害性を持たないにもかかわらず、警察権力の介入による書き換えを強制された。アメリカ軍政下だけではなく、このような検閲は戦前も存在した。沖縄の広義の文学者達の革新への志、沖縄の伝統的な素材への関心、しかし時として行われる権力の介入。この「時花唄」は本書の中心的なモチーフを全て含んでいる。そしてそれは様々な形で、沖縄の文学表現に広く内在する問題であった。

「王国の解体」では山里永吉の「首里城明渡し」を取り上げ、ひとつは沖縄近代の歴史がたどり直され、同時にこの近代沖縄の出発点を描いた作品が、昭和初期、敗戦後、復帰後という時代を通して、沖縄の民衆に愛された理由を明らかにしようとする。近代沖縄は激動であり、激変の歴史ではあるが、その中に通底する沖縄の宿命と民衆の意識が、一つの戯曲の成り立ち、上演法、受容者のとらえ方をという多面的な分析から、浮かび上がる。

「位牌と遺骨」では副題にあるとおり、「出郷」という近代沖縄のもう一つの重要なモチーフが取り上げられている。ひとつは宮城聡の小説「故郷は地球」をめぐる上京の問題である。本土に移住せざるを得なかった沖縄出身者のうけた、差別をはじめとする様々な困難については、既に数多く論じられているが、それと海外移民を描いたジョン・シロタの戯曲「レイラニのハイビスカス」を組み合わせることで、仲程氏は「出郷作品」という新しい観点を提示した。実際、若い世代を含めた沖縄出身者の故郷へのこだわりや、何十年も海外に暮らした海外移住者の口からぼろっと出るウチナーグチなど、他府県出身者には理解しがたいものだが、上京で感じた差別や違和感、劣等感に対して、ハワイにおける「故郷は地球」なのだという感覚を併置させることで、沖縄県民の郷土観と世界観を再度検討するための重要な論考になっている。

第四部「海外の琉歌・戦後の短歌」は「摩文仁詠歌の地平」と『Hawaii Pacific Press』紙に掲載された琉歌」の2つの論文からなる。この末尾に置かれた2つの論考は、まさに本書の性格、および仲程氏の関心対象の広がり象徴的に示しているといえよう。

「摩文仁詠歌の地平」はまさに沖縄の民衆にとっての沖縄戦論であり、摩文仁という特別な空間についての論である。仲程氏はそれを、淡々と民衆の短歌を並べることで解き明かそうとした。死者に対する万感の思いをわずか31文字の中に歌い上げる民衆達の短歌は、どのような解説よりもくっきりと沖縄戦の有り様を伝えているといえよう。沖縄の個性的な詩人や小説家達の背後には、このような分厚い層の「歌」がある。これは沖縄に限ったことではなく、およそ文学というものの本質であろう。実際民衆の作品に目をむける研究も無いわけではないのだが、文学というものの総体を考えた場合、近代文学研究は明らかにバランスを欠いているのではないか。文学研究者のはしぐれのひとりとして、自戒を込めてそのように思う。

『Hawaii Pacific Press』紙に掲載されたペルーの琉歌」においては、ハワイ琉歌会に所属したペルー移民の琉歌という、きわめて特異な対象が取り上げられている。それはあたかも「沖縄文学」という概念を、どこまで広げることが出来るのか、試みているかのようである。人間が多かれ少なかれ持たざるを得ない、自己の起源への関心。それが言語によって表現されたとき広い意味で

『沖繩文学の諸相』

文学になるのだ。ただし仲程氏はそのような抽象的な事を主張しているのではない。たとえばペルーの琉歌が、そのモチーフに一定の限界がある原因を、ハワイ琉歌会が提示した「課題」に求めている。表現への強い意志と、それを制限する現実的で具体的な要因が常に葛藤しているのだ。仲程氏の論は一方で、対象を広げながらも、安易な抽象化には向かわず、絶えず個別具体的な事象から、離れることはないのである。

以上のように本書の特徴は、なによりも「広さ」にある。そしてその広い対象を序列化、体系化するような志向は見られない。これは本書が書き下ろしではなく、独立性の高い論文をまとめたものであるという事情もあるが、仲程氏の研究姿勢の本質でもある。

近代日本は文化においても中央集権の歴史であった。多くのいわゆる文化人が東京に在住し、大出版社、報道機関の本社も東京にある。日本の中でも特に固有の文化をもっていた沖繩においては、これはヤマト化という形で現れた。この一方向的なうねりは、一見するともはや最終段階を迎えつつあるように見える。

その一方近年政治的には地方分権、文化的にはローカル文化の見直し、再創造の機運が現れている。生物と同様、文化も多様性を失えば全体の生命力を失ってしまうのではないかと、という危機感である。本書の提示したモチーフはそのような普遍的な問題とも、密接に関わっている。

もちろん仲程氏はこのような抽象的な問題には触れないし、方言の話者が減少している問題についても、ただその事実を淡々と記すのみである。本書は「沖繩文学」がいかにも多様であることを示している。言い換えれば「沖繩文学」を概括し、体系化するようなとらえ方に対して、「諸相」として、すなわち多様性を多様性として提示しているのだ。おそらく本書を、補完的な研究であるとか、周縁的な記述と見るのは過ちであって、周縁にこそ中心があるという、沖繩文化そのものの生命力と重なっているのである。

最後にもう一度確認する必要があるのは、本書においては、取り上げられる作品群が多様であるという事だけにとどまらず、教育、歴史、政治、あらゆる面から、作品の有り様を検討しているという点である。そもそも文学というものは他の領域と密接に関連しているものだが、極端に急激な近代化と、戦争、占領といった激変にさらされた沖繩の文学にとっては、まさに欠くことの出来ない視点だといえるだろう。そしてそのような激変の中であって沖繩文学が、他でもなく沖繩文学たり得たのは、その根底にある民衆の「歌」であったことを、本書は強く示唆している。

(沖繩国際大学)